

結城宗廣と能「結城」

長 谷 川 端

—

昨年（平成十二年）十一月十九日（日）に、伊勢市岩渕町の光明寺で、能「結城」を観る機会を得た。本曲は南北朝時代の暦応元年（一三三八）十一月⁽¹⁾にこの地で没した南朝方武将結城宗廣の靈を慰めるために、大正八年十一月二十一日に新作・初演された。光明寺の現住である勝峰義忠師によれば、忌日に奉納されたが、永らく跡絶えていたのを、昭和六十年に鐘楼⁽²⁾落慶法要のあとに同じ勝田流の演者たちに奉納してもらい、その後は大体毎年演ぜられているとのことである。

伊勢には、その起源が平安時代に溯るといわれる伊勢猿楽三座、「和谷・勝田・青苧」があり、南北朝・室町時代を通じて伊勢国の国司であった北畠氏の庇護を受けていたが、北畠氏が織田信長に滅ぼされて以降振るわなくなる。三座は、和谷が一色へ、勝田が通へ、青苧が竹ヶ鼻へ移住して、農作の傍ら伝統を守ってきたが、青苧は後継者を失って滅び、和谷は元禄の頃に喜多流に所属し、勝田は現在まで大流派に属することなく、伊勢市通町の人々によって続けられ、社中の所在地の名を採つて、「通り能」と呼ばれ、現在八田英己氏を中心にして伝統が守られている。

本曲の原作者西川盧翁は明治二十二年から大正七年三月まで光明寺に住し、昭和二年一月に龜山市の宗英寺で円寂した。現在使用している面は、勝峰師が福井県丹生郡宮崎村の面造り師北沢一念氏に依頼して打ってもらったものである。

結城宗廣の忌日である十一月十七日（新暦）に行われていた能の奉納は平成十一年からは忌日に近い日曜日に行われるようになったとの事で、昨年は十一月十九日であった。午前十時半に境内の結城宗廣墳墓の前に光明寺の檀家の人々が集まり、和尚の読経に続いて、焼香が行われた。十一時から本堂での演能が始まり、廊下の上に臨時の橋懸りが置かれ、ワキの登場となった。

仰ぐも高き神風や、神風や。神の都にまいらん。是は陸奥の國より出でたる僧にて候。我白河の里に住みながら、結城入道の御墓所をも知らず候程に、此の度思い立ち勢州行脚と志し候。（中略）急ぎ候程に、山田の原に着きて候。人有り、尋ねばやと思ひ候。

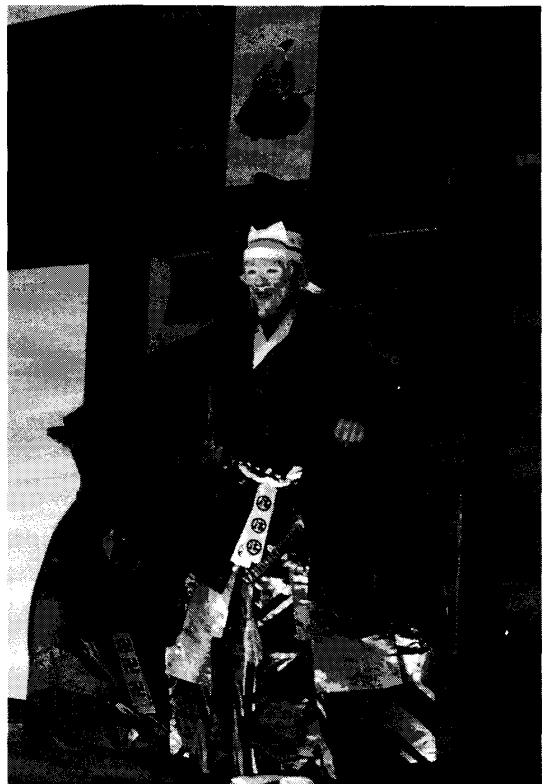
すぐに前シテである墓守の登場となり、ワキに墓の由来を尋ねられて、結城上野入道の献言によつ



て、後醍醐天皇の第八宮（のちの後村上天皇）の御座船を中心にして、五十余艘の兵船を仕立てて陸奥へと船出をした船団が、陰暦八月十日過ぎに天龍灘で台風に遭って漂流し、もとの伊勢に吹き戻されたこと、宗広が病に臥し、壮絶な死を遂げたことを語る。この部分は『太平記』巻二十の「結城入道墮地獄事」の再話である。

前シテはワキの僧に、あなたは誰かと問われ、「我は誰とも白河の、流れもつきぬ物語り」とのみ答えて橋懸りから消え、中入となる。

観客を退屈させないためと、シテの負担軽減のためか、中入の十分ほど前から、橋懸りに後シテが鎧姿で弓矢を手に待機していたが、一昨年までは、前シテ・後シテは一人で勤めていた、とは勝峰師のお話。誰かが、自分のことを、「十惡五逆の重障過極の人なり」というが、自分の「忠魂義胆」は悪風に碎かれてしまい、恨めしいと、後シテは訴え、「我道忠（注宗広の法号）の幽靈なり」と告白する。そして、「たとえ惡逆無道の罪人と」言われても、かまわない。自分が無間地獄の苛責に苦し



宗広の肖像画がシテの頭上に見える

んでいるとお聞きになった帝が、「贈位の追賞」をして下さったお陰で、「今こそはれる、我が瞋恚、實に聖代の鴻恩と言うかと思えば光明の、寺おこないの鐘の音に、夜もほのぼのと明けにけり。夜もほのぼのと明けにけり」と結んで、終りを迎えるのである。

二

以上見たように、能「結城」は大旨「太平記」の記事に依拠しながらも、宗広の「瞋恚」は「聖代の鴻恩」である「贈位の追賞」によって晴れたとする。これは、本曲の作られた大正八年の前年の忌日とされる日、つまり大正七年十一月十八日に正二位への追陞⁽³⁾が行われたことと符合する。

ところで、『太平記』の「結城入道墮地獄事」（天正本の章段名は「結城入道病死事」）は、山田の地で病患に倒れた結城入道は、臨終に際して僧に、追善は不必要であり、ただ朝敵の首をわが墓に掛けよという子への遺言を託して死ぬが、彼と縁りのある律僧（天正本は「禪僧」とする）が武藏国から下総国へと下る途中で夢のような出来事に遭遇し、山伏（天正本は「容色美ナル法師」とする）実は地蔵菩薩から教えを受け、宗広の子息にそれを話し、追善供養は丁寧に営まれた、とする。つまり、宗広は、自分の遺言とは逆に子が営んだ供養によって救われた、と記しているのである。これについて、中西達治氏は、「（宗広の）一族が、父の遺言に従わなかったというのである。こうした遺族の態度は、この記事が書かれたころの政治的状況の反映としてみることができる。子孫の供養によって、入道は地獄の呵責から救われると同時に、自らの妄執からも解き放たれる。『太平記』を享受す

る側の受け止め方はそうならざるを得ない⁽⁴⁾。」とされた。太平記の記述は政治の規制から逃れられなかつたとする指摘は正しいのであるが、太平記作者が結城入道墮地獄の話を地蔵菩薩の靈験譚として構想していることも忘れてはならないことであろう。

注

- [1] 結城宗広が病没した月日は、諸本および系図では一定していない。結城文書・光明寺文書・同寺位牌等から考えると、十一月中であろうと思われる。
- [2] 光明寺には、常盤井摂政関白藤原実氏が寄附したと伝えられる古鐘一口がある。古来伊勢にあっては、神境ということで鐘をつくことは許されていなかったが、天正年間に豊臣家の特許を得て、毎日二回この鐘をつくことにしたという。
- [3] 文化四年（一八〇七）白河藩主松平定信の儒臣広瀬蒙斎が宗広の旧城白川搦手城の崖に、宗広の忠烈を讃える碑文を彫った時点あたりから、宗広仰讚の機運が拡まった。明治九年には結城神社は村社となり、社殿が改築され、宮中から祭祀料が下賜された。同十五年には別格官幣社となり、同十六年には宗広に正四位が追贈された。同三十八年には正三位が贈られ、さらに宗広は大正七年に正二位に追陞されたのである。
- [4] 中西達治「臨終の悪相と墮地獄——『太平記』における結城入道——」（長谷川端編『太平記とその周辺』平成六年新典社刊所収。のち同氏著『太平記の論』平成九年おうふう刊所収）